

木の下に馬を隠した。ラバウル港が眼下に見える高台で見通しのよい場所に身体を伏せた。

眼下のラバウル港を見渡せば第八方面艦隊が勢揃い、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦合わせて二〇隻がいる。敵は紀元節に各部隊が休養しているのを知っていたのだろうか。「アッやられる」。瞬間敵機の編隊は私が身を伏せている高台の眼前から、一波二波と梯団をくんで急降下して行く。ラバウル湾はハワイの真珠湾とよく似た港である。攻撃の第一波はロッキードハドソン数百機、魚雷が巡洋艦に命中、黒煙が上がる。潜水艦は慌てて潜水するが、泡が尾を引いて上から丸見えだ。魚雷が迫っている。水煙が上がる。こんな攻撃が三〇分ぐらい続いた。敵機が引き上げた後は、各艦が黒煙を上げて炎上している。第八方面艦隊はこの敵襲で大損害を受けた。

その後、修理を完了した艦はトラック島に集結し再編成した時点で、また敵の猛攻撃を受け沈没または大破炎上し、事実上ラバウル方面艦隊は全滅しラバウルの海軍は戦力の機能を停止した。

その後はしじゅう足の早いポートシコルスキーF4U

が上空より攻撃してきた。攻撃が終われば陣地構築だ。洞窟を掘り塹壕を掘り戦車壕を掘る毎日だ。マラリアと栄養失調の身体で、祖国のため軍人精神を発揮して奮闘したが益のない努力であった。そして終戦を迎えた。

## 北緯五十度以北から

### サンゴ礁の南太平洋まで

石川県 武部 敏 克

海防艦「石垣」に乗艦を命ぜられ大湊港へ直行、途中高岡駅で父母と面会、尊敬する教班長が自宅当てに打電してくれたお蔭だ。

大湊防備隊で一宿一飯に預かり、「石垣」は、浮ドックで諸整備、菊の御紋章を脱し軍艦から海防艦と名を改め、八戸沖で試運転後、一路千島に向かって航行す。

船酔いにもなれ、地球上で一番波の高い荒天の海域、開戦まで艦首に菊の御紋章付きだった「石垣」は、ピッキング、ローリングの大揺れ五〇度の傾斜にも耐えるよ

う、復元力の大きい構造に設計されている。

幌筵海峡に投錨、巡洋艦「多摩」や「阿武隈」が目の前に碇泊、駆逐艦、潜水艦などで海峡はところ狭しといっぱい、数の多さにこれが第五艦隊の威容かと感嘆した。

初めてのアリュウシャン方面攻略作戦に従事、幌筵海峡とダッチハーバー近くまでアツツ島、キスカ島を遠近に見ながらベーリング海との連続往復行動だった。アリュウシャン方面防備強化作戦にも従事、作戦航海中は北緯五十度以北の艦上勤務ならではの待遇だった。作戦行動中、数回潜水艦を捕捉、爆雷攻撃・対潜掃討が行われ、海面に重油が浮き上がってきたが、擬装ではなかったか、成果は海中のことで判明せず。

ソ連船を臨検、僚艦数隻で捕捉、航海士ほか拳銃携帯でソ連船に乗船、当時海峡に機雷が流れており、その疑いでの積荷、乗客の臨検だった。オホーツク海海上でたびたび漁船から「蟹」や「鱈」の提供があり、当方から「タバコ」「菓子」などを差し上げたように思う。

そのころ、当直明けにデッキへ戻る途中、いつまでもつづくうす明かりの空に、これが北の果て北極の「白夜」

かと眺める余裕が出てきた。電気長はサイドという単語の好きな、綺麗好きで口髭の良く似合う立派な人柄の人で、達筆の書道家である。

その電気長の影響で工機学校電気科を志望し、艦内試験の時、無言の間違い指摘のお蔭で電気術練習生に合格、進学することができた。「サン」づけになってまごついたころ、念願の工機学校行きのため、幌筵海峡で退艦、根室、室蘭経由で横須賀に向かう。

艦装以来の好気質の艦風のもと、良識ある上司に恵まれ、実戦教育を受けた「石垣」を後に、凍りつく北海の勤務をすませ、桜咲く内地への一步を記した。

海軍工機学校電気術練習生として入校す。雨の日の入校式、プール開き、競泳出場、紅白帽子で遠泳訓練時、逗子沖の会場、海抜零メートルから見る富士山、雲の上の予想以上の高いところに頂上が見え、さすが日本一と掛け声をかけたくなるような心境だった。座学、実習と時間に追われる毎日だった。

優秀な担任教官に恵まれ、各学科の試験の成績により食事の席順をその都度変えるなど、練習生の奮起を促さ

れた。階段教室の学習、法則や定理などの座学や実習も充分理解できた。

このあたりから専門的な技術集団の仲間入りとなり、運命の分かれ道、分岐点に入った感を強くした。

海軍潜水学校に潜航術練習生として入校す。寒中の朝、上半身裸体操で少しずつ海軍軍人らしくなったような気がした。珍しく大竹に降雪があり、雪中近くの山林でウサギ狩りあり、戦果はタヌキ一匹、ウサギ七羽、タヌキはどこへ消えたか、おそらく教官の方々はタヌキのスキ焼で一杯と思うが、練習生はウサギのメッタ汁、あまり美味な感じがしなかったように記憶している。

同期練習生諸氏は優秀な方がたの集まりで、当方ドロナワ式でどうにか落伍もせず、遅れもせずについていったように覚えている。

潜水艦は複雑な機能のため、一人の操作ミス、不注意で、二度と浮かび上がれなくなる。全員の生命にかかわることで、全乗員、責任感が人一倍つよい技術屋集団のため、潜航中禁煙、出撃時の酒類積載等は絶対になかった。

呂六七号潜水艦に乗り込む。佐鎮籍第三潜水隊（呂六〇型）数艦が舞鎮管轄に移管されることになり、受け取り要員として先発、前任者より管制盤操作はか青写真により配線、配管の引継ぎを受け、別名ハトポツポ型ともいう機器操作は手動が多く旧型、旧式だった。

定員の配置もすみ、数日後、潜水学校の練習生を乗せ、水上体験航行中、右舷担当下士官の管制盤操作ミスでスパーク発生とモーターの異状回転、運転する二二号ディーゼル機関が大音響、機関長が飛び込んでくる。カイズ電流が異状を示す。抵抗を入れて遮断、管制盤少々延焼、腕に火傷を受けたが大過なく納まった。潜伏、鎮座の訓練で潜航寸前だったのが幸いだった。もし潜航中だと事故故につながるところだった。信頼を失った下士官は即日退艦させられた。

敵潜が出没する危険海域、豊後水道の従来時、別府に入港、機関長のお供で「黒靴」（黒靴は何でも入る）持ちで上陸した。母港、呉港の上陸は一番奥の電池棧橋からで街までは遠い。呉の街には人生の縮図の思い出があまりにも多く、最高のお世話になった土地で多々感謝す

るのみである。

昭和二十年三月二十四日グラマン戦闘機の空襲により上膊部、胸部を負傷する。

呉港第四ドックに呂六七潜はか僚艦数隻、修理人渠中の朝、グラマン戦闘機数百機、五分後に呉上空に達する見込みの情報あり、確かに蠅の塊のように一団、二団、三団となって来襲、呉港内各艦船よりバリバリと対空砲火、戦艦「大和」が港内に健在、大きな音は「大和」の主砲の音でなかったか。

ピカピカチラチラと敵機が被弾して落下するのが見え、その瞬間頭上にグラマンの影が映る。反射的に身を伏せると同時に小型爆弾数発落下、破裂（黒色火薬）、爆風、破片、目の前、ドック内、真っ暗闇、空母からの発進だから滞空時間が短時間と思いが、長い長い時間を感じられた。敵機の爆音が小さくなり、ポーンと夜明けのように明るさが戻ってきた。

周囲を見れば前や横、後方に数十人の五体の肉片がバラバラに散乱、生き残った戦友の姿はなく、甚大な被害をこうむり、筆舌に尽くし難い苦痛である。

壕に運ばれ呉海軍病院に急送、体育館に死者と一緒に並べられる。最終診断で病室へ、もう少して死者と一緒に運び出されるところだった。今まで意識が切れるなど二度死線をさまよったが、ついに三度目の負傷（戦傷第一種症）となった。

潜水艦といえば一番空気が欲しい。意識が途中で切れる、回復しまた切れる。確かにあの世は誠にきれいな色をしている。その間、あの世とこの世は地続きだとの説のとおり、だれかの遠くから呼ぶ声で意識が回復、九死に一生を得たが、初めて生きれている喜びを実感した。グラマンの野郎と長い間思っていたが、負傷しなかったら潜水艦は攻撃兵器、あのころの潜水艦乗りは飛行機乗りと同じ消耗品で生き残れない。

昭和四十一年の春、胸部盲貫弾片の摘出手術を行ったが、今ではグラマンのお蔭で生きながらえたとと思うようになった。

当時の戦死者は大竹へ回航時、艦上から正式に水葬され見送った。新型波号潜水艦の横積み蓄電池の調査修理に乗艦のとき、輸送物資満載で潜水艦が輸送船になり戦

局の厳しさを感じた。ドイツ敗戦後、Uボート数隻入港、呂五〇〇型と改めた。電気系統修理に乗艦したが、木製の甲板がなく魚雷管は日本艦に比べ細かったように思った。当時の乗組士官、戦後駐日武官のクルグ大佐が昭和六十二年十月来沢され、当時を思い出し語り合った。超々大型潜水艦エンジン四基、飛行機三機（晴嵐）搭載（伊四〇〇型）に、電気系統の学習のため横付けしたが、戦艦「大和」に横付けした駆潜艇のような感じに思った。いまでもフツと「ドンガメ」乗りのころを思い出すが、「急速潜航ベーント開け」「急速浮上メーンタンククロー」、活気のある総員配置に就いた行動号令。人港用意、前部ハッチ開け、何事にも「五分前」精神は風化なく、今も懐かしい教訓である。

清く正しく、実行第一の海軍の教えを語り伝えて、太陽の熱と光、味のある大気など自然の恵みに感謝し、若くして戦没された戦友の霊に黙祷をささげ、ご冥福をお祈り申し上げるとともに、余命を地域社会のお役に、社会福祉、民生の向上に、安心と平和のために尽くさせて頂く所存であります。

## 満州―南方作戦転戦記

熊本県 山本武行

### 動員令

満州第一部隊にも七月になり八十六飛行場大隊として、南方作戦参加の命が下された。数日間、初年兵もあわただしさが続き牡丹江を出発する。貨車に乗っての南下であり客車と違い割合に自由にできて身体は楽であった。私たちが満州に行く時と違い、行き交う列車には年若い召集兵らしい顔がみえ、我々の交替要員かと思つた、可愛想な気がしてならなかった。船団を組むまでの間、門司市大里付近の民宿に宿泊。ほんの数カ月ぶりなのに畳が何と懐かしいことよ、多忙な初年兵にとってくつろげる数日であった。

### 輸送船団

瑞穂丸に乗船。船室は二段に仕切られぎゅうぎゅう詰め、息苦しい感じで真つすぐに立つこともできず、通路